

2020. 8. 9 第二主日礼拝

I コリント 4:14-21 「子どもとして諭すパウロの心」

聖書

14 私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして諭すためです。

15 たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人もいるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。

16 ですから、あなたがたに勧めます。私に倣う者となってください。

17 そのために、私はあなたがたのところにテモテを送りました。テモテは、私が愛する、主にあって忠実な子です。彼は、あらゆるところのあらゆる教会で私が教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。

18 あなたがたのところに私が行くことはないだろうと考えて、思い上がっている人たちがいます。

19 しかし、主のみこころであれば、すぐにでもあなたがたのところにいきます。そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく力を見せてもらいましょう。

20 神の国は、ことばではなく力にあるのです。

21 あなたがたはどちらを望みますか。私があるあなたがたのところに、むちを持って行くことですか。それとも、愛をもって柔和な心で行くことですか。

はじめに

パウロは自分やアポロの名前を出しながら、働き人は主に召された共労者であり、主に対して責任を負っていることを述べながら、コリント教会の高慢を正そうとしました。教会内に〇〇派、〇〇派という分裂分派が起こってしまうのは、「自分は正しいが、あなたがたは間違っている」という互いに裁き合うことが原因です。こうした体質がコリント教会には巣くっていること

を見たパウロは、人を裁くことも自分を裁くこともせず、神さまの前に先走った裁きをしないように戒めたのです。分裂分派の根には「一方にくみし、他方に反対して思い上がる」(6節)人間の傲慢が存在しています。その傲慢が顕著に表れていたのがコリント教会でした。パウロはそれを正し、神の教会としてふさわしく導く責任を感じていました。責任というよりは、生みの親としての重荷です。パウロの親心と言ってもよいでしょう。今日はそのパウロの親心に触れることができれば幸いです。

1. 愛する子どもとして

14節「私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして諭すためです。」とあります。「これらのこと」とは何を指しているのでしょうか。それは6~13節に記されている内容で、ひと言で言えばコリント教会への皮肉と自己憐憫(憐憫:自分を哀れに思うこと)です。

コリント教会には神さまから豊かな賜物が与えられていました。パウロは教会に与えられた豊かさに対して、あたかも何ももらっていないかのように自分を誇るのには傲慢の極みだと指摘しています。さらに自分たちは十分に満ち足りておりパウロの助言など要らないというコリント教会の姿を捉え、まるで自分たちが王様のようになっていると述べています。「あなたがたは、もう満ち足りています。すでに豊かになっています。私たち抜きで王様になっています。いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったです。そうすれば、私たちもあなたがたとともに、王様になれたでしょうに。」(8節)とは、パウロの痛烈な皮肉です。

またパウロをはじめとする使徒たちは、自分たちは公開死刑場に引いて行かれる者のように見せ物とされ、愚かで弱く卑しめられ、経済的にも報われることなくひどい扱いを受け、この世のくず、かすになったと、本当に哀れな者だと訴えました。「今のこの時に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物も

なく、ひどい扱いを受け、住む所もなく、労苦して自分の手で働いています。ののしられは祝福し、迫害されては耐え忍び、中傷されては、優しいことばをかけています。私たちはこの世の屑、あらゆるものの、かすになりました。今もそうです。」(11-13節)。ほんとうにこの世的では報われない働き人の姿を表しています。

こうした痛烈な皮肉と同時に哀れみを誘うような表現をしたのは、コリント教会を辱めようとしたのではなく、愛する子どもとして諭すためでした。ここにパウロのコリント教会に対する深い愛情を見ます。

2. 生き方を問う

パウロのコリント教会への愛情は、自分が教会の生みの親であり父であるとの自負から来ています。「たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人も、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」(15節)。養育係とは、当時のギリシャの貴族が自分の子どものために雇った奴隷のことを指し、仮にそのような者が一万人もいたとしても、養育係は父親にとって代わることはできず、父親は一人でありそれがパウロ自身であると言っているのです。

パウロは生みの親であるだけでなく、「ですから、あなたがたに勧めます。私に倣う者となってください。」(16節)と模範者としての自覚も持っていました。見方によっては高慢に聞こえますが、これは高慢ではなく使徒としての意識の高さを表しており、混乱した教会の実情を踏まえるなら、ここまで言わなければならなかった理由がわかります。見習うべき模範者として自分を示したパウロは、自分の代わりに最も信頼している同労者テモテを派遣しました。パウロにしてみればテモテは同労者というより、忠実なわが子のような存在で深い信頼を寄せていることがわかります。そのテモテは「あらゆるところのあらゆる教会で私が教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。」(17節)と、

パウロの生き方を示す器として期待されています。

「私に倣う者」「私の生き方」ということばには、キリスト者の在り方が示唆されています。キリスト者のことをクリスチャンと呼びます。ギリシャ語のクリスティアノスから来ており、「キリストの属する者」という意味があります。当時の弟子たちは何かにつけキリストの名前を持ち出すので、あだ名として付けられたものです。クリスチャンということばを一般の方がどのような印象を持って受け止めているのか定かではありませんが、少なくとも私たちはその意味するところを知って、クリスチャンということばを使うことができたら幸いです。キリスト教というと「教え」のように理解されていますが、生き方を示すものであり単なる教えではありません。事実、弟子たちがキリスト者と呼ばれる前は、「この道の者」と呼ばれており、弟子たちを見ているとそこにキリストを見ることができたのです。それゆえにパウロは「キリスト・イエスにある私に倣う者」になって欲しいと願ったのです。お互いに不完全な者であり、至らない者であることは十分承知の上で、パウロの告白に倣う者とさせて頂きたく祈りましょう。

3. 神の国は力にある

パウロの生き方を真摯に学び受け止める姿勢がコリント教会にあれば良かったのですが、残念ながらそうではなかったようです。ある人たちはパウロ自身がコリント教会に来ることはないと思いがっていたのです。「しかし、主のみこころであれば、すぐにでもあなたがたのところに行きます。そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく力を見せてもらいましょう。」(19節)と、必要ならコリント教会に行く用意があると忠告しています。

「思い上がっている人たちの、ことばではなく力を見せてもらいましょう。」という言い方は、先の「私に倣う者」「私の生き方」に通じるもので、福音に生きる者には力があるのです。「神の国は、ことばではなく力にあるのです。」(20節)とは、実にキリスト教信仰の核心を突く言葉で、思想や信条を形に

変える力があるのです。なぜなら、イエスさまは今も生きて働いておられるので、そのいのちに触れているキリスト者にはイエスさまの力が働いているからです。その力は人を変える力ではなく、自分を省み、自分を変える力として働くのです。

福音が自分を変える力として働いた実例を山崎製パンの創業者飯島藤十郎の中に見ます。彼はパンの会社を興す前の一時期、新宿中村屋で奉公として働いていました。中村屋の創業者相馬愛蔵がクリスチャンでしたので、その影響を強く受けて後に洗礼を受けます。山崎製パンの創業時代は、リヤカーにパンを積んで町を歩きながら売っていたそうです。そのリヤカーの荷台には、パンと一緒に「神は愛なり～ヨハネの福音書」という看板が掲げられていました。最初順調だった経営がしばらくして問題が起こりました。藤十郎と弟の一郎の間に、経営方針を巡って激しい対立が起こったそうです。藤十郎の長男が間に入って、なんとか調整しようとしたのですがうまくいかず、息子(現社長)までが父と意見の相違で対立してしまう事態になってしまいました。收拾がつかなくなって、それを何とかしよう決心して、その方法として三人で話し合い、三人揃って洗礼を受けたのが飯島藤十郎の洗礼を受けたきっかけでした。その一件落着となった洗礼後の11日目のことでした。主力工場の武蔵野工場が全焼するという大事件が起こってしまったのです。しかしクリスチャンとなっていた彼らは、この時、「火災はあまりにも事業本位で仕事を進めてきたことに対する神の戒めだ、これからは神の御心にかなう会社に生まれ変わります」と祈りを捧げたのでした。

この話を聞きながら、信仰は自分を省み、自分を変える力があることを感じました。火災を人のせいにならず、神への祈りに代え、信仰によって会社の経営方針を変えたことにより、現在年商1兆円の大企業になっているのです。現社長の飯島延浩氏も熱心なクリスチャンです。

私たちキリスト者一人一人の内に働く神の力がどれほど大きなものなのか、

その生き方をもって示すことができたら幸いです。「どうか御父が、その栄光の豊かさにしたがって、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように。」(エペソ 3:16)。

まとめ

ことばで福音の恵みを届けることも必要であり幸いなことです。しかし、ことばだけでは届かない世界もあります。そこには具体的な神さまの愛の力が必要なのではないのでしょうか。「神の国は、ことばではなく力にある」という神の力の証として、キリスト者一人一人の生き方が示されたら幸いです。私たち一人一人の生き方を通して、キリストを映し出すことができますように祈りましょう。キリストを映し出す方法として、神さまは人の弱さをういなきるのではないのでしょうか。自分の弱さや失敗を通してキリストが映し出されることが多いのです。それゆえに、弱さを誇り、弱さの中に現されるキリストを証できたら幸いです。パウロの親心として、自分もそうであったように、弱さを通してキリストを映し出すようにとの声が響いて来ます。今週の私たちの歩みの上に、主の恵みが豊かでありますようにお祈りします。